



三度の水難に思う

昭和21年12月、南海地震による津波に襲われたのは、生まれた大阪から福井町湊の母の実家に疎開していた時。すべてがさらわれた後、裏山の薪小屋での従兄弟たちとの避難生



桑野町
入谷 五十鈴さん

活は、4歳の子どもにはキャン普のようなものだったが、ちようどそこへ南方戦線から命からがら復員した父に、振る舞うご馳走も無かったのは気の毒だった。

2度目は昭和35年5月のチリ地震。高校3年生の私は山の上から福井川の水が全部引いたかと思うと、大きな津波が押し寄せるのを見た。波は大事な山羊や鶏たちを

小屋ごと太平洋に持って行ってしまった。

3度目は結婚して那賀郡鷺敷町に住んでいた、昭和46年8月30日。台風23号で増水した那賀川に長安口ダムの放流が重なり、ほんの30分位の間に自宅の1階が水没。2階の屋根から息子を背負い、娘の手を引いて、救助の舟に乗り移り鷺敷中学校の体育館で一

敷中学校の体育館で一夜を明かした。これがきっかけとなり一家で桑野町に引っ越したのだった。

今の東日本大震災とは規模が違うかもしれない。しかし誰の人生にも想定外の出来事は起こる。そんなときにも命と希望さえあれば、力を合わせ、人間は再起することができる。

次は、羽ノ浦町の吉岡厚子さんにお願いします。

市民文芸

短歌

平成23年阿南市春季短歌大会 作品

入選 真田美代志
六十年を鎮座まします内裏離一度お膝をくずしまいらせ

入選 矢野 道子
点点と小花寄せあふ雪柳純な白さが春陽をこぼす

入選 小畑 定弘
乾杯のグラスの氷片噛みしだく肩書一つも持たざるわれは

入選 米田 啓子
稲やかな海の狂いて一瞬に怒濤となりて人家呑み込む

入選 三好 薫
種芋を土に預けて雨を待つ畑は祈りのごと夕焼けて

入選 山田ノブコ
ポップコーン爆ぜることくにパツパツと梅咲き初めて心明るむ

入選 久積多美子
後手後手と原発事故のまつわりて地震の復興あわれ遅るる

同窓のたよりが届く梅雨籠

大上季美子

枇杷つつむ様を猿の見てをりぬ

河野千枝子

桐の花映す柵田や鯖の道

阿部てるみ

青葉してすつぱり困む忠魂碑

佐野八重子

立ち止まり右見て左蜥蜴かな

張本 雅宣

花胡瓜すでに曲りし実をつけて

山川 良子

梅雨冷や薄き一枚重ね着し

榎原さつき

子を連れて親が本気の高取り

安部 正剛

貸座敷莫塵の青さや海開

森 君江

川柳

阿南川柳会
高木旬笑 選

ストレスは無い栄養過多という独居

林 満子

裏の顔表の顔を持って生き

原 公美子

正夢であった吉報舞い降りる

野村 敏子

親知らず心の準備いる抜歯

持木 寿栄

安物と聞けば飛びつく庶民たち

佐野 智子

俳句

阿南市俳句連合会選

梅雨兆す腰に痛みを覚えけり

森 泰子